

言語の形態
的分類

二、言語の形態的分類

言語は前節に述べた如く、其の血族關係を標準として系統上から分類することが出来るが、此の外尙ほ之を形態上から觀察することも出来る。即ち言語の語法的構造を標準として之が異同を分類するのである。斯くの如き分類法を言語の形態的分類といふのである。

一、形態上の分類

世界の言語は形態上幾種に分類することが出来るかといふに、古來學者によつて種々の論がある。併しながら其の最も普通にして合理的なる分類法は、孤立語、添着語、曲尾語、緝合語、抱合語、分析的言語等となすものである。今次に此等の種類の特質を説明しよう。

(一) 孤立語 (Isolating Language)

支那語、緬甸語、安南語、暹羅語、西藏語等の如く、一音節が孤立して夫々の獨立せる意義を有する如き性質の言語をいふのである。即ち支那語の如き、漢字を以て書き表はされた一字一字が何れも獨立した意義を有して居るのである。換言すれば一字一字が實辭たる性質を有して居るのである。(中には虚辭即ち所謂助詞の達したものである)。孤立語は又一音節が一語をなすものであるといふ見方から、之を單音節語又は單音節語 (Monosyllabic Language) ともある。

單に孤立といへば、英語の I must go o bed の各語は何れも一音節で一語を成して居るから、一寸考へると英語其の物も孤立語であるが如くに思はれるけれども、それは寧ろ偶然の出來事で、英語は其の全體の性質として、後にもいふ如く、決

して孤立語ではないのである。

孤立語は各語が一音節より成らねばならぬことを條件とするので、同音が幾回も重出し、語彙の數も大いに制限せられることになる。此の制限を切り抜け、語彙の増加を計らうため、此の種の言語にありては、一つの音節に對して數種の音調アクセントを附し、之によつて意義の區別をさせようと力める。支那語の所謂四聲は實にこれに起因するのであるが、必要に應じては四聲以上を區別することがある。實際今日の支那方言中には八聲以上を有するものもあるのである。

又支那語にありては、語に品詞の別のないものが可なり多くある。例へば「行」の字は名詞(おこ)にも動詞(おこ)にもな、「之」の字は代名詞(これ)にも動詞(く)にも助詞(の)にもなるのであるが、此等の意義の區別は其の文中の位置即ち語位によつて決定せられるのである。

要するに音調と語位とは孤立語の性質として缺くべからざる二大要素といはねばならぬ。

(二) 添着語 (Agglutivative Language)

孤立語に於ける

支那語の四聲

支那語に於ける

添着語

孤立語は箇々の語が各々獨立の價值を保持しつゝ、並立するのであるが、會々其の並立の程度が接近し融合する場合には、一方の語は他方の語に對して從屬的關係を保つやうになる。即ち一方は依然として實辭であるのに、他のものは虚辭の性質を帯びるやうになる。而して其の從屬的關係も絶對に不可分離のものにあらずして、離さうと思へば何等の無理もなく自由に引き離し得る程度にあるのである。斯る言語上の現象を指して添着又は加添、膠着、漆着、粘着といひ、斯の如き性質を有する言語を添着語又は加添語、膠着語、漆着語、粘着語といふのである。

添着語に屬する言語は其の數甚だ多いが、其の中の重なるものはシラフルタイ語族の大部分、マライ、ポリネシヤ語族、非利加士語の一部分等である。我が國語及び朝鮮語の如きも、添着語に屬するものである。先づ國語に就いて之をいへば、其の虚辭即ち助詞の如きは實辭即ち名詞、動詞の如きものより轉じたものが少なくない。名詞の「邊」より助詞の「へ」(は)を(方)向を(表)を生じ、動詞の「出る」より助詞の「より」を生じたるが如きは其の例である。其の他國語の性質として、實辭の下にいくつもの虚辭がついて一つの長い文を作ることが出来る。例へば讀ませられたの

如きは「讀ま」なる實辭の下に、獨立の資格なき「せ」「られ」「た」等が附いたもので、明かに添着の性質を示して居る。朝鮮語に於ても、助詞「씨」(以て)は動詞「다」(用ひ)より生じたるが如き、又「너에게라도……」(汝に)が「너」なる實辭の下に「에게」「라도」なる虚辭の附いたものであるが如きは、前者と同一關係に立つものである。

孤立語の添着語に進む傾向

以上述べた所によつて見ても、大體添着語なるものは孤立語から發達したもののやうにもいへる。實際支那語の如き孤立語とはいひながら、古くより「於」「乎」「哉」の如き虚辭を有し、殊に近世の支那語即ち時文と稱するものなどにありては「石」と「石頭」「裏」と「裏兒」などいふ如く、一語の意義が二字を以て書き表はされ一方が全く他の從屬的のものと變する傾向を有して居る。斯くの如く支那語は孤立語より漸次添着語に變化しつつあるやうに思はれるけれども、こは寧ろ偶發的の現象で、支那語全體に通する特質としては、依然として孤立語たる性質を失はぬのである。

曲尾語

(三) 曲尾語 (Inflectional Language)

曲尾 (Inflection or Flection) なる語は通常動詞の活用、及び名詞形容詞の語尾變化

屈折語

曲尾語の語尾にしも獨立した語より轉化

添着語と曲尾語とに於ける添着の程度

の兩者を合稱するもので、印度日耳曼語族に概ね之を有して居る、而して斯くの如き變化を有する言語を曲尾語又は屈折語といふのである。

曲尾語に於ける語尾は、其の起源に溯れば、或る獨立の意義を有した語に歸反することの出来るものが多い。例へば英語の動詞 Walked, Called 等に於ける過去を表はす語尾 -ed は其の始め Walk なる動詞より、佛蘭西語の動詞 Parlerai, Aimerais 等に於ける未來第一人称をあらはす語尾 -ai は羅旬語 habeo (私は持つ) より出た類である。

曲尾語にありては語幹と語尾との結合が頗る緊密で、明かに其の間の區別をなすことが出来ぬのが特徴であるが、添着語にありては、其の間の離合が自由であるといふ點に於て、大いに趣を異にして居る。例へば羅旬語第三活用に屬する「支配す」といふ動詞 (不定法 regere) の直說法單數の活用は

	(現在)	(過去)	(未來)
第一人称	Rego	Rexi	Regam
第二人称	Regis	Rexisti	Reges

第三人稱

Rejit

Rexit

Reget

のやうになり、何等の主語をも附せずして Regeto といへば直說法第一人稱現在單數、*Regeto* といへば直說法第三人稱過去單數なることを知り得る如く、語尾自身が意義上重大なる役目を演じ、語幹と些かも離るべからざる密接なる關係に立つて居るのである。

添着語の曲
尾語に就む
何向

添着語の從屬的部分も、曲尾語の語尾も、多くは或る獨立した意義を有する語から轉成したものであるが、曲尾語の語尾は添着語の從屬的部分に比して遙かに融合の度が強く且つ深い。つまり添着の度が一層進めば曲尾語になり行く傾向を有して居るのであつて、添着語といひ曲尾語といふ、必ずしも其の間に嚴格なる區別が存して居るのではない現にシラルアルタイ及び其の他の添着的性質を有せる言語中には、明かに曲尾的性質を有して居るものがある。國語に於て「これは」「これを」といふ場合には、助詞「は」「を」は明かに上の語と分離せられて添着的性質を表はして居るが、假りに之を「こりや」「こりよ」と發音する時は、意義こそ以前と相違無けれ、形式に於ては全體より「は」「を」を分離すること難く、全く曲尾的

性質を帯びるに至るのである。朝鮮語に於て「ユ것을」これは「ユ것을」これを「ユ것」といふが如きも同一現象である。然らば國語及び朝鮮語の如きも曲尾語の一員に數へ得るかどうかといふに、それは孤立語たる支那語に添着的現象が存するも之を添着語と稱すること能はざる如く、其等の曲尾的現象は寧ろ偶發的のものであつて、此等の言語の内部に潜める根本的特質ではないのである。随つて國語、朝鮮語の如きは、どこまでも添着語に屬すべきものといふべきである。それから曲尾語たる印度日耳曼語族には根母音變化(Gradation)の現象が著しく表はれる。根母音變化とは如何なることかといふに、同一語源に出でたる語が母音の變化により夫々異なる意義を有するに至ることをいふのである。其の發生の動機に關しては今茲に論及せぬが、例へば英語の名詞 Man, Foot (單數)が Men, Feet (複數)となつて複數を意味するが如き又英語の動詞變化 Sing, Sang, Sung 獨逸語の動詞變化 Stehen, Stuhl, Gestohlen 等の如く母音の變化によつて夫々意義を異にすることはいふのである。歐米の學者中には此の現象を以て言語の内部に潜める優秀なる機能の表現せるものなりと論じ、印度日耳曼語族を以て有機的

無機的言語

的言語 (Organic Language) となし、他の語族を無機的言語 (Inorganic Language) と稱した人がある。併しながら言語は著しく劣等なるものならざる限り、夫々精緻なる特徴を有せざるものなく、有機的ならざるものがない。これは畢竟自己の言語を優等視した歐米語學者の偏見と見ねばならぬ。

緝合語

(四) 緝合語 (Polysynthetic Language)

一文が箇々の語の結合せられて成りたる一箇の集合體なりとの觀念を吾人に與ふることなく、吾人が文を品詞に従つて分解するが如く之を一語一語に分つこと能はざるものを緝合的性質を有する言語即ち緝合語といふのである。南北亞米利加の各種の土語の如きは之に屬する。例へばエスキモー語にて *Sialugsiok-ippuk* は *He is outside in the rain* を、チエロキ語にて *Nachholinin* は *Bring us the boat* を意味し、長き一文の觀念を與へるけれども、孤立、添着、曲尾等の諸語が一文を各品詞に分類し得る如く、之を一語一語に分つことが困難で、全體が一語の如き感じを與へるのである。

緝合語
性質

緝合的性質は南北亞米利加土語の特質と稱することが出来るけれども、其の

他の言語にも時として此の現象の發生することが無いではない。例へば曲尾語たる羅旬語 Anabuntur は They will be loved を意味し、直說法、受身、第三人稱複數の未來となり、他に何等の語をも加ふることなくして、此の一語が一文の作用をなし、又添着語たる我が國語「打たせられた」は過去の使役相を意味し、見方によつては結合的性質を帶べる一箇の語とも見做し得るのである。

さて文と單語との發達の順序に關しては、從來二様の反對説がある。即ち文は單語の集合して成れるものなと論ずる學者と、結合的性質を帶べる一語即ち文が根本であつて、單語は文よりも後に成立したものであると論ずる學者とである。後者は多く心理學派の言語學者の唱道する所で、つまり吾人の思想は決して單語を羅列せる如き形式に於て構成せらるゝものにあらず、文を單語に分類するが如きは、之れ後世語法家の技巧に出でたもので、形式論に過ぎぬと論じて居るのである。此等の論の可否は今俄かに之を斷すべからざるも、前者の動もすれば形式論に流れ易いことは深く注意せねばならぬ。殊に我が國の語法を論ずる者が、國語其のものの性質を研究闡明せず、徒に西洋文法の形式に倣つて品詞

孤立語は原始
的言語か

抱合語

の分類をなし、語法の論を試みるが如きは、誤れるの甚だしきものといはねばならぬ。此の形式派と心理學派との論争は言語形態上の發達順序にも異論を惹き起して来る。即ち單語を言語構成の出発点と見倣す前者にありては、支那語の如き孤立語を以て人類の原始語となすのであるか、文を以て言語構成の根本となす後者にありては、上述の緝合語を以て原始的言語と見倣するのである。

(五) 抱合語 (Incorporating Language)

緝合的又は添着的性質を帶べる言語にして、一文中の動詞が其の目的格たる語を己れの前に置き、恰かも其の語が文中に抱合せられて別立せざるが如き觀を呈するものを抱合語といふ。メキシコ語の如きは其の例である。例へば同語にて *ka* は「食ふ」の意であるが、*ni-k-ka* (*I-it-eat*) は *I eat it* を意味するが如く、目的格の *ni* が主格と動詞との間に挿入せられるのである。而して *ni-k-ka* の如き構造に於て代名詞が之に依つて代表せらるゝ名詞の先驅として文中に挿入せられることは、同語に於て最も普通の現象である。例へば *nikka in nakati* は *I it eat the meat* を意味し、其の *nikka* 中の代名詞たる *k* は其の本語たる *nakati* の先驅

として用ひられて居るのである。抱合的性質はメキシコ語の外、バスク語、匈牙利語等にも發見することが出来る。

ポットが緝合語と抱合語とを同一の言語と見做して居るに對し、セースは反對説を唱へ、緝合語は之を箇々の單語に分つべからざるに、抱合語にあっては其の挿入せられたる部分が尙ほ一箇の獨立せる單語たることを聯想せしむる点に於て大いに趣を異にして居ると論じて居る。

二、言語發達の順序

以上述べ來つた數種の言語は形態上各種の共通点を有し、全然根本から性質を異にして居るものではない。殊に孤立、添着、曲尾の三者は、孤立より漸次添着へ添着より曲尾へと言語進歩上の三階段を形造つて居るやうに考へられる。即ち孤立語に於ける實辭は、漸次虚辭に變じて添着的性質の言語となり、それが更に融合して遂に曲尾的性質の言語を構成するが如くに考へられて居るのである。斯くの如き觀察からいへば、言語の最も原始的のものは孤立語で、最も進歩したものは曲尾語乃至緝合語といふことになるのである。併しながら孤立語が果し

て原始的の劣等なものであるか、曲尾語乃至緝合語が果して進歩した優等のものであるかごうかは、俄かに斷言することが出來ぬ。其の證據には、孤立語を用ひる支那の上代にも既に燦然たる文明が生み出され、今日野蠻なる生活を繼續して居る未開人種の間にも、曲尾乃至緝合的の言語を使用しつゝある事實が澤山に存して居のである。

分析的言語
總合的言語

總合的言語
分析的言語

斯くの如く一方に於て言語發達の經路は、孤立語より曲尾乃至緝合語に進むものであるといふ風に論ずる人もあるが、又他の一方には其の發達の經路は曲尾乃至緝合語より孤立語に進むものであると論ずる學者もある。之を言語學上の律語を以て表はす時は、前者は分析的言語 (Analytic Language) より總合的言語 (Synthetic Language) に進むもので、後者は總合的言語より分析的言語に進むものと稱することが出来る。而して前にも屢々説明した如く、分析的言語は從來如何にも幼稚なる言語の如く考へられ來つたが、言語の實際の發達上から觀察するときは、總合的言語より分析的言語に進んで來る例が少なくない。例へば羅旬語 Amabuntur は「彼等は愛せられるだらう」(直說法、受身、第三人稱、複數、未來)を意味し

一語即ち一文をなす総合的(緝合的)の言ひ表はし方であるが、之を英語に書き表はすと、其等語尾の變化は全然消失し、They will be loved の如き數語を費して始めて同一の思想を言ひ表はすことが出来るやうになるのである。名詞の語尾變化に就いても、羅句語と英語とを比較して見ると

羅 句 語		英 語	
Nominative Case	Bellum (單 數)	war	(單 數)
Accusative Case	Bellum (")	war	(")
Genitive Case	Belli (")	of war	(")
Dative Case	Bello (")	to war	(")
Ablative Case	Bello (")	by war	(")

の如くなり、羅句語の語尾變化は英語に於て失はるゝ代りに前置詞が發達し、之によつて意義を補ふことになる。又羅句語にありては Belli は一語として所有格を表はすのであるから、多少文中の位置を變更するも、明かに其の意義を知ることが出来るが、英語に於ける of war は必ず制限(modify)せらるべき語の後に來ら

ねばならぬやうな運命を持つに至るのである。羅匈語以前のサン、スクリ、ットの如きは、格(Case)のみに就いていふも、羅匈語より多く、單數に八種、兩數に三種、複數に六種あつたのである。それが希臘語、羅匈語を経て稍々其の數を減じ、以て今日の歐洲諸國語となつたのであるが、其の中でも、露西亞語、獨逸語、伊太利語の如きは、今日尙ほ數種の格を有し、英語、佛蘭西語の如きは殆んど之を失つて居るといつても差支ない。要するに英語の如きは、總合的言語の分解せられて生じた分析的言語と稱すべきもので、其の形態に於て支那語の如き孤立語に近寄り來つたものと見る事が出来るのである。要するに言語の發達順序に關しては、分析的より總合的に進むとなす説と、總合的より分析的に進むとなす説との兩種あつて、全く反對の立場になるのであるが、今は之を詳論するの時機でないからこれ位に止めておく。

然らば支那語の如き孤立語は、今後數百年乃至數千年を経たならば、漸次曲尾語に推移し行くべきか又英語の如き曲尾語は同じく數百年乃至數千年の後は孤立語に推移し行くべきかといふに、それは前にも述べた如く、一大疑問であ

孤立語は曲尾語に曲尾語に孤立語に變化すべし

る。孤立―添着―曲尾、又は曲尾―添着―孤立の三段的發達は如何なる言語にも認め得る現象であるが、夫々の言語の内部に潜める固有の傾向は、依然として永く存続すべき性質を有して居る。即ち孤立語は孤立語、添着語は添着語、曲尾語は曲尾語、緝合語は緝合語、抱合語は抱合語として各別の發達を遂げ行くべきものである。